

# 主体的に問い続ける学習者の育成

## ～論理的思考を基盤とした「課題発見・解決学習」の推進～

教務主任 平井奈穂子

### I 主題設定の理由

本年度の研究テーマを「主体的に問い続ける学習者の育成～論理的思考を基盤とした『課題発見・解決学習』の推進～」と設定した。

#### 1 今日の課題から

21世紀の社会は新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す知識基盤社会と言われていいる。情報化やグローバル化などの社会的変化が加速していくなかで、これらの時代を生きる子どもたちは、何が課題なのかを考え、他者と協働しながら新たな価値の創造のために必要な力を身に付け、変化の激しい社会と主体的に向き合い、その解決の過程をとおして、自己を確立しつつ、たくましく生き抜く力を身に付けることが重視されている。また、多様な価値観が存在する中で、物事を比較して分析する力、新しい知識と既存知識を関連付けて課題を解決する力、自分の考えを筋道立てて説明する力など、正解のない課題を解決するために必要な「考える力」の育成が求められる。

#### 2 生徒の実態

生徒の実態については、過去3年間（平成26年度から平成28年度）の全国学力・学習状況調査において、平成26年数学A問題を除く全ての教科で正答率が全国平均を下回るなど、身に付けた知識・技能を活用することに課題がある。また、広島県「基礎・基本」定着状況調査生徒質問紙の「自分のよさは認められている」などの項目で、肯定的回答の割合が過去3年間県平均を下回るなど、自己肯定感にも課題がある。

#### 3 昨年度の研究の成果と課題

成果として次の2点を挙げる。1点目は、生

徒が相手に自分の考えを上手く伝えるためには筋道を立てる必要があると感じ、意識して取り組んでいた。2点目は、思考ツールを使用することで、生徒が自発的に思考ツールを活用するようになり、思考の流れを整理しようとする態度が見られた。課題としては、生徒アンケートの「自分の考えを筋道立てて説明できる」の項目について、3月、7月、11月の3回のアンケート結果に大きな変化が見られなかったことが挙げられる。この課題を踏まえ、今年度の実践につなげてきた。

### 4 研究主題について

#### (1) 「主体的」とは

平成30年度広島県教育資料では、「主体的な学びとは、学習者基点の能動的な深い学びである」と定義されている。

#### (2) 「問い続ける」とは

中央教育審議会答申・別紙1（平成28年12月）では、「各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ」の探究的な見方・考え方について「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会や実生活の文脈や自己の生き方と関連付けて問い続けること」と記されている。黒上（2017）によると、「問い続けるというのが（中略）探究のプロセスがスパイラルに継続するイメージに呼応する。（中略）いずれにしても重要なのは、このサイクルが連続することである。そしてその中で、新たな課題が生み出されることが「問い続ける」ことである。」とあり、「課題発見・解決学習」において振り返りの段階で新たな疑問が生まれ、そのことが次の課題につながるという探究のサイクルを繰り返すことで生徒の主体的な学びを促し、さ

らには新しい時代に求められる資質・能力の育成が図られると考える。

### (3) 「課題発見・解決学習」とは

平成30年度広島県教育資料では、『課題発見・解決学習』とは、児童生徒が自ら課題を見付け、課題の解決に向けて探究的な活動をしていく学習である。」とあり、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・創造・表現、実行、振り返りなどの過程を示している。広島県では、これからの社会で活躍するために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」の創造を目指しており、その「主体的な学び」を促す教育活動として、生徒自らが課題を見付け、課題解決に向けて探究的な学習をしていく「課題発見・解決学習」を推進している。

これを踏まえて、本校では「鷹取中学校授業スタイル」を作成し、全教科・領域、学校行事などのあらゆる場面で実践している。

### (4) 「論理的思考」について

国立教育政策研究所から「平成29年度・30年度教育課程研究指定校事業」（中学校・論理的思考）の2年間の研究指定を受け、「社会の中で活用される論理的思考やそれらを表現する力を学校全体で育成するための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究」の指定課題のもと、どのような目標設定とするのか、そのためには教科等間でどのような連携等が行えるのか、どのような教育課程を編成するのか、目標実現状況の評価をどのようにすべきか等について実践研究を進めている。

以上のことから、本校においては、育成を目指す資質・能力を生徒に身に付けさせるために、全教科・領域で論理的思考を基盤として、「課題発見・解決学習」を進めることが主体的に問い続ける学習者の育成につながると考え、本研究主題を設定した。

## II 鷹取中学校における教育推進の方向性

鷹取中学校における教育ビジョンを中央教育審議会答申「学習指導要領改訂の方向性」に基づいて説明する。

## 1 何ができるようになるか

本校では、学校教育目標「夢や目標に向かって仲間とともに主体的に学び、未来を創造できる生徒の育成」を踏まえ、育成を目指す資質・能力「知識・技能」「課題発見・解決力」「主体性」の3つを設定した。これは中学校学習指導要領解説総則編（平成29年）の育成を目指す資質・能力（生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）の3つの柱に則して設定したものである。本校の3つの資質・能力を具体的に述べると、「知識・技能」は課題の解決に必要な知識及び技能、「課題発見・解決力」は、問いを見だし、その解決に向けて仮説を立てたり、結果を予測しながら実行したり、調査して得た情報を元に自分の考えを形成・表現したりするとともに、仲間と互いの考えを伝えあうことで多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりすることなどをおして、課題解決したことを、次の課題発見・解決につなげる力、「主体性」は、すべての学習や活動に主体的・協働的に取り組むとともに、仲間と互いの良さを生かしながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度である。

## 2 何を学ぶか

表1はカリキュラム・マップである。本校の3つの資質・能力を育成するために教科等横断的な視点で作成した。総合的な学習の時間を軸とし、1学年の1年間のすべての教科と領域の各単元、題材の学習内容、その単元で育成すべき資質・能力や論理的思考、ESDとのかかわりを1つの表にまとめた。

表1 第1学年 カリキュラム・マップ

教科等	各教科等で概念的に育成する論理的思考	学習指導要領の改訂に係る単元等	
		単元名等	育成する資質・能力
総合的な学習の時間	「総合的な学習の時間」において、主体的に学び、課題を設定し、探究的な活動を通して、課題の解決を目指す学習活動	「学びに向かう力・人間性等」	「課題発見・解決力」
	「総合的な学習の時間」において、主体的に学び、課題を設定し、探究的な活動を通して、課題の解決を目指す学習活動	「知識・技能」	「課題発見・解決力」
国語	「国語」において、主体的に学び、課題を設定し、探究的な活動を通して、課題の解決を目指す学習活動	「知識・技能」	「課題発見・解決力」
	「国語」において、主体的に学び、課題を設定し、探究的な活動を通して、課題の解決を目指す学習活動	「知識・技能」	「課題発見・解決力」
社会	「社会」において、主体的に学び、課題を設定し、探究的な活動を通して、課題の解決を目指す学習活動	「知識・技能」	「課題発見・解決力」
	「社会」において、主体的に学び、課題を設定し、探究的な活動を通して、課題の解決を目指す学習活動	「知識・技能」	「課題発見・解決力」

### 3 どのように学ぶか

図1は鷹取中学校授業スタイルである。これは、「課題発見・解決学習」の過程を学校教育目標、育成を目指す資質・能力、生徒の実態を踏まえ、本校独自の学習過程（鷹取中学校授業スタイル）として作成したものである。内容は、前回の授業の振り返りをもとに、生徒自身で課題を設定し、その課題の解決のために必要な情報を収集し、得た情報を整理・分析し、自分の考えを筋道立てて説明するという1時間の授業を展開していくものである。黒上（2017）は「探究の主体は、子供である。」と述べている。「学習者起点の能動的で深い学び」とはこのことを意味しているのではないか。この過程をスパイラルに何度も生徒自身が繰り返すことが主体的な学びの創造につながると考える。

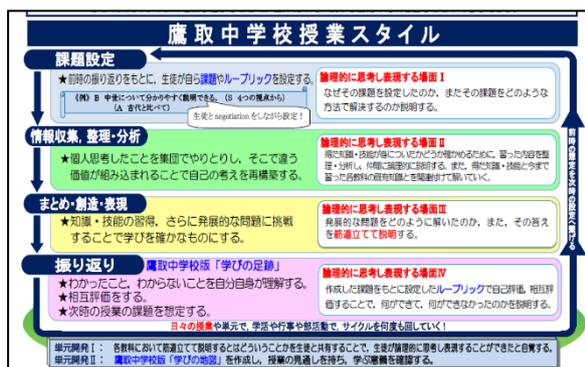


図1 鷹取中学校授業スタイル

### III 本校における論理的思考及び各教科における論理的思考

全教科・領域で論理的思考を基盤とした授業展開を進めていくうえで、論理的思考の定義を全教科で統一する必要があると考え、生徒の実態を踏まえ「思考スキルを用いた活動を通して、事実や根拠に基づいた自分の考えを説明し、さらに協働的な学びにより思考の深まりを促す過程」と設定した。また、これをもとに各教科における論理的思考を設定した。(表2)

表2 各教科における論理的思考

福山市立鷹取中学校各教科における論理的思考	
鷹取中定義	思考スキルを用いた活動を通して、事実や根拠に基づいた自分の考えを説明し、さらに協働的な学びにより思考の深まりを促す過程。
国語	言葉を通して、情報と情報の関係性(共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)を正確に読み取り、根拠を明確にして自分の考えを適切に書き、それをもとに協働的な学習によって、思考の深化・発展を図ること。
地理	地理に関わる事象についての意味や意義、特色や相互の関連を資料から読み取り、解釈したことを根拠を明確にしたが筋道立てて説明すること。
歴史	歴史に関わる事象についての意味や意義、特色や相互の関連を資料から読み取り、解釈したことを根拠を明確にしたが筋道立てて説明すること。

### IV 「課題発見・解決学習」と論理的思考とのかわり

「課題発見・解決学習」と論理的思考とのかわりは次の2点である。1点目は、鷹取中学校授業スタイル（「課題発見・解決学習」）の一つ一つの過程において、論理的思考が関わっているという点である。課題設定では、なぜその課題を設定したのか、またその課題をどのような方法で解決するのか説明する。情報収集、整理・分析では、どんなデータや情報が必要か、集める方法、集めた情報で必要なものはどれか、自分の知っている情報は何かなどを考える。また、思考スキル・思考ツールを使って、情報を整理・分析する。まとめ・表現では、自分の考えに仲間と交流して得た考えを統合して、自分の考えを更新し、表出する。振り返りでは、作成した課題をもとに設定したループブックで自己評価、相互評価することで、何ができて、何ができなかったのかを書く。2点目は、「課題発見・解決学習」の1つの過程から次の過程へ進む際にも論理的思考を働かせる必要がある。課題設定ができれば、次はどのようなことを教師が示すのではなく、生徒自身が考えることに大きな意味を持つと考える。

### V 研究の取組

#### 1 鷹取中学校授業スタイルを推進するための工夫

##### (1) 鷹取中学校授業スタイル生徒版の作成

図2は鷹取中学校授業スタイル生徒版である。鷹取中学校授業スタイルを生徒と共有することで主体的な学びの推進につながると考え作成した。表面は「課題発見・解決学習」の過程、思考スキル、思考ツール、ループブックなど鷹取中学校授業スタイルを生徒にも理解しやすいように工夫し、裏面は思考ツール一覧表が記された下敷仕様になっており、生徒はこれを見ながら筋道立てて表現する学習している。最終的には、この下敷きを見なくても、自分自身で本学びのスタイルを進めることができる

ことを目指したい。

**鷹取中学校授業スタイル**

**課題設定** ★自分たちで課題を設定しよう！

① 前時の振り返り  
② めあての提示  
③ 個人課題の設定  
④ 全体課題の設定  
⑤ ルーブリックの設定 (S・A・B)

**情報収集** ★課題を解決するために必要な情報を集めよう！

＜情報ソース＞  
・先生の話  
・教科書、資料集  
・これまでの学習 (教科書など)  
・家庭学習 (宿題) でも実施可能  
・実験・観察  
・インターネット  
・図書室の本、映像、その他  
・友達の考え  
・校外での聞き取り

**整理・分析** ★必要な思考スキル、思考ツールを考え、整理しよう！

① 思考スキル、思考ツールを使って、得た情報を整理する。  
② 自分の考えをさらに組み立てる。

**まとめ・表現** ★相手に筋道立てて表現しよう！

・全体発表 ・グループ発表 《筋道ルーブリックで相互評価》

**振り返り** ★課題をふまえて授業を振り返り、次の授業につなげよう！

① 学びの足跡の記入 《学びの足跡ルーブリック》  
② 文流  
③ 次の授業について

図2 鷹取中学校授業スタイル (生徒版)

## (2) 課題設定の工夫

本校では課題設定を生徒自身が行っている。「なぜ、何、どのような、どうして」などのキーワードをつけたり、思考スキルを踏まえながら設定したりしている。思考スキルを活用した課題設定を行うことで課題がよりオーセンティックになっている。生徒自身が課題を設定することで、その課題が自分ごととなり、そのことが主体的な学びへとつながるのである。各教科での課題設定の工夫はこの後の「各教科の取組」で詳しく紹介する。

## (3) 振り返りの工夫

振り返り (学びの足跡) では、生徒は後述するルーブリックを活用して記述している。その後、交流することで学びをさらに価値づけるために、クラス全体で交流している。各教科での振り返りの工夫はこの後の「各教科の取組」で詳しく紹介する。

## (4) 学びに向かう力の育成

研究を推進していくなかで鷹取中学校授業スタイルを実現するための基盤となるのが論理的思考であると考え、研究を進めてきたが、論理的思考および鷹取中学校授業スタイルそのものを動かす「力」が必要ではないかと考えた。それは学びに向かう力である。自分の学びをコントロールする力である。黒上 (2017) によると、学びに向かう力は「計画・メタ認知・見通し」であると述べている。先述した課題設定、振り返りはこの「計画・メタ認知・見通し」を意識した取組である。

## (5) 研究体制と職員研修

研究体制としてプロジェクトチームを編成している (図3)。校長、教頭、教務主任、研究主任を中心に編成しており、研究の方向性を考え実施している。

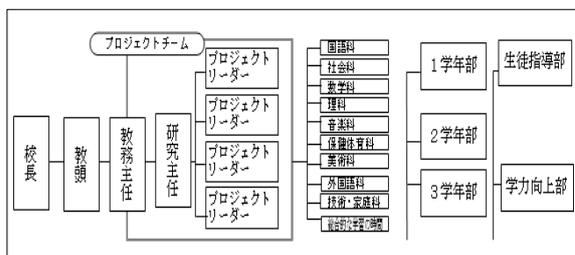


図3 研究体制の組織図

また、昨年度より、関西大学総合情報学部教授黒上晴夫氏には、学びに向かう力、主体的な学び、課題設定の在り方、振り返りの方法、ルーブリックの設定、思考ツール、思考スキルの活用方法など多岐にわたってご指導をいただいている。

さらに、日頃より鷹取中学校授業スタイルの推進や「この思考スキルならこの思考ツールじゃる〜」などといった思考スキルや思考ツールの効果的な活用方法についての実践交流が職員室で自然と話題に上がる場面が多々見られる。教師同士が切磋琢磨しながら研究を推進している表れであることは本校の誇りであり、プロフェッショナルな教員集団であることは間

違う。



写真1 校内研修の様子

## 2 論理的思考を育成するための工夫

### (1) 思考スキル・思考ツールの活用

昨年度より本校では、考えるための技法（思考スキル）、思考を可視化するための思考ツールを学校生活のあらゆる場面で活用している。

課題解決に必要な思考スキル、例えば、「比較して考えよう」とか、「構造化して考えよう」など生徒に提示することで、何をどう考えたらいいのかわかりやすくなり、そのことが課題を解決することにつながる。

また思考ツールという図の上に自分の考えを置くことで、思考を可視化することができる。同時に、どこにどんなアイデアを書けばよいかをその図が導いてくれるので、生徒たちにとって大変有用である。しかし、思考ツールを使うことが最終目標ではなく、それらを使って根拠を明らかにしながら筋道立てて相手に分かりやすく伝えることが最も重要であると考え。また、思考ツールを何度も使うことで、思考力の育成が図られ、さらには、生徒自身で思考スキルを設定することで生徒が自発的に考えることにつながるのではないかと思う。

### (2) 思考ツールタイム、思考ツール集会の実施

思考ツールを生徒が自由に活用できるようにするために、毎週金曜日の朝10分間で思考ツールを使って班員と交流する取組をしている。テーマはその時期や学校行事に合ったテーマを教師が決めている。（図4）生徒は3分でアイデアを思考ツールの上におき、6分で班員に筋道立てて説明するという内容である。授

業でも自発的に思考ツールを使うようになってきた。

**思考ツールを使って考えを深めよう！**  
**NO. 1** 2018年（平成30年）4月19日（木）

活動の流れ（8:30～8:40＜10分間＞）

1. <左手チャートを使った個人思考＜3分＞>
2. 班で交流する（班員に筋道立てて説明する）＜6分＞
3. 班長がプリントを回収＜1分＞

図4 思考ツールタイムのワークシート

また、月に2回、思考ツール全校集会を実施している。毎週金曜日の思考ツールタイムは教師主導で行っていたが、この集会は、生徒がテーマや思考ツールを考え、全体の司会、進行やグループのファシリテーターなど集会のすべてを仕切っている。テーマの提示後、1グループ5名程度の異年齢集団に分かれ、交流する。グループ交流後、全体交流をする。1集会1クラスが担当し、提案前になるとクラスで話し合いを重ねテーマと思考ツールを決めていく。テーマは様々で、掃除について、防災について、友達関係について、夏休みの過ごし方についてなど多岐にわたる。縦割りグループということもあり、3年生がリードして会を進めたり、1年生が全体の場で堂々と自分の考えを述べる姿もあり、思考ツールの活用だけではない素晴らしい場面が多々見られる。



写真2 思考ツール集会の様子

### (3) ルーブリック評価の設定

本校では3つのルーブリックを全教科で設定している。1つ目は、「筋道ルーブリック」である。昨年度の研究の課題の1つである自分の考えを筋道立てて説明することができる実感している生徒が3月、7月と11月のアンケートで変動が見られなかったことに対する手立てとして、筋道立てて説明できていたかどうかを相互評価・自己評価する場面を設定した。しかし、生徒一人一人が自分の「ものさし」で評価することで、生徒同士の人間関係から、評価の信頼性に欠ける場面が見られた。そこで「筋道ルーブリック」を設定した。これは、①結論・理由・まとめのながれであること、②具体例や体験などが入っていること、③比較・分類・関連付けなどが含まれていることが要素として組み込まれている。このことにより、相互評価の信頼性も高まり、生徒自身の自信につながり、他者からの肯定的な評価を実感したり、もっとわかりやすく伝えるためのゴールイメージを持ったりすることで、自己の表現内容の改善につなげることができるようになった。2つ目は、「課題に対するルーブリック」である。授業の最初で教師による「めあて」を提示した後、生徒が教師とネゴシエーションをしながらルーブリックを設定する。このことで本時の具体的なゴールイメージを共有することができる。3つ目は「学びの足跡ルーブリック」である。授業の最後の振り返りの際に生徒が記述する。課題に対してわかったこと、わからなかったこと、できたこと、できなかったことのみならず、できたことに対して何を工夫したからできたのか、できなかったことに対しての理由や改善点、さらには学習したことが他のどの場面で活用できるのかなどを筋道立てて記述する。授業の振り返りとはどういうことなのかを生徒と共有することで、さらに学びを自分自身のものにすることができ、また次時の課題設定へ結びつけることもできる。

### 3 鷹取中学校版「学びの地図」の作成

図5は鷹取中学校版「学びの地図」である。カリキュラム・マップを生徒にわかりやすくしたもので、1学期の授業の見通しを生徒に持たせるため、各学期の授業初めにそれぞれの教科ごとに生徒に提示している。内容は単元の目標、学習内容など各教科で工夫されており、生徒はその学期に「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」を自覚することができる。

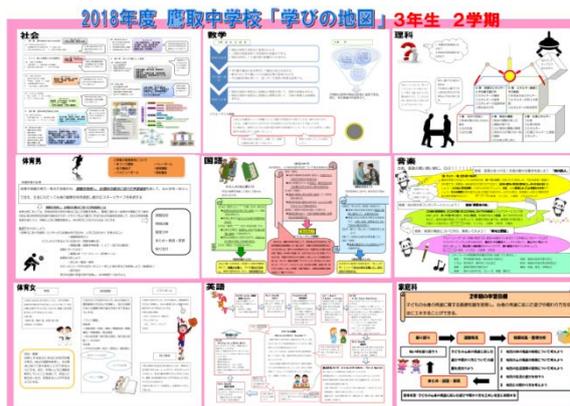


図5 鷹取中学校版学びの地図

### 4 「総合的な学習の時間」カリキュラムの作成

表3は総合的な学習の時間の1時間ごとのシラバスである。

「みんな大好き！ふるさと福山！」をテーマに3年間の学習がつながるように内容を設定した。1年生は「福山博士になる！」を目指して、前期では校区内の地域に詳しい方から聞き取りをし、後期では校区から福山市に範囲を広げて、「福山PR大作戦」と題して福山市内の企業や行事・イベントなどを紹介するために生徒が主体的に情報を収集し最終的には発表会等でプレゼンテーションをする。2年生は「お仕事名人になる！」を目指して、前期では職場体験学習、後期ではグループごとにSDGsに関連した課題研究を行う。最終的には修学旅行でSDGsを推進している企業を訪問し、それをレポートにまとめる。3年生では「未来創造の達人になる！」を目指して、12月に行われる「子ども・大人市民会議 in 鷹取」を生徒自身で計画、運営、提案をする。提案内容はSDGsを軸

として、福山の未来をもっと明るくするためのプレゼンテーションを行う。その内容を参加者と対話することで、さらに自分たちの提案内容を充実させる。全学年、鷹取中学校授業スタイルを意識して学習を進めている。また、本校はユネスコスクールに登録しており、ESD さらにはSDGs へつなげている。

表3 総合的な学習の時間のシラバス

福山市立鷹取中学校 総合的な学習の時間 年間指導計画 英2018年度(平成30年度)版									
学年	学期	単元	学習目標	学習内容	学習活動	評価	学習成果	学習態度	学習意欲
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	2	1	1	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	1	1	1	1	1	1	1	1
3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	2	1	1	1	1	1	1	1	1

## 6 生徒自らが学びを創造する授業展開の工夫

鷹取中学校授業スタイルは主体的な学びを推進するための1つの方法である。大切なのは、この授業スタイルをだれがどのように活用するかではないだろうか。そこで、本校では2学期より、社会科、理科、保健体育科、家庭科、英語科の5教科で新たな取組として、生徒が自ら学びを創造する授業を実践している。これは、教師が50分話し続ける授業ではなく、生徒が「主役」で教師はあくまでも「脇役」に徹し、自ら主体的に学ぼうとしている生徒を「見守る」というものである。当然教師の発話量は減少し、その代わりに生徒の主体性が向上し、鷹取中学校授業スタイルが生徒自身のものになる。つまり、生徒が鷹取中学校授業スタイルを試行錯誤しながら推進することで、彼ら自身が主体的な学びを創造しているのである。そのことが、困難な課題に出会ったとき、課題の本質を見抜き、自分の持っている知識や技能を發揮しながら仲間と協力してその課題を主体的に解決するという本校の3つの資質・能力の育成につながる。と考える。

### (1) 取組内容

#### ① 学習計画を立てる

生徒は教師の作成した「学びの地図」や教科書等を参考にしながら自分の学習計画（「学びの地図」）を作成する。（図6、図7）そこには、授業のめあて、ルーブリック、鷹取中学校授業スタイルのサイクルに則った学習過程が組み込まれている。1時間かけてその単元の学習計画を作成することで、授業内容を見通すことができる。授業はじめに「先生、今日、何するん。」という質問はだれもしないのである。



図6 生徒が作成した学びの地図（英語科）

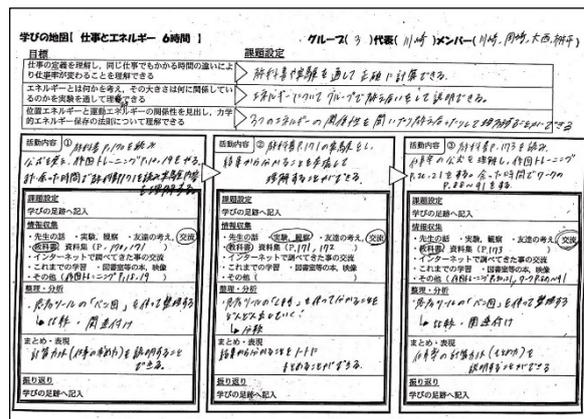


図7 生徒が作成した学びの地図（理科）

## ② メタ認知、見通し

単元の終末に評価テストを実施し、学びがどこまで身についたのか確認したり、日々の学びの足跡の記入の際に、何ができるようになったか、なにがわかったか、学んだことをどんな場面で生かせるかなどを生徒に考えさせたりしている。

### (2) 教師の手立て

本取組を進めている教師は、発話量が減少した50分をどう過ごすか、どのように授業を改善すべきか課題設定をした。手立てとしては、次の6点を挙げる。

## ① 定着度の把握

個々の生徒の学習状況, 定着度を把握するため, 生徒の思考を妨げない程度でノートチェックをする。

## ② ICT 機器の活用

ICT 機器を利用してモデルとなる良い実践をしているグループを紹介する。

## ③ 肯定的評価

机間指導しながら肯定的評価をする。

## ④ 生徒自身に気づかせる

教師は生徒に直接間違いを指摘せずに, 間違いに気づくようなヒントを与え, 生徒同士の対話をとおして気づかせる。

## ⑤ グループへの支援

思考活動が停滞しているグループには手立てとして具体的なアドバイスをする。

## (3) 成果と課題

### ① 成果

#### ア 主体性の高まり

課題解決の過程で, 生徒自らが主体となって解決のための活動を展開することで全員が課題に対して自分の考えを持ちながら主体的に解決しようとしている。

#### イ 協働的な学びの向上

生徒同士がお互いの知識を交流し, 協力して課題を解決しなければならない状況を教師が仕組んでいくことで, 意識して相手の話を聞いたり, 自分の考えを伝えたりしている。

#### ウ 授業スタイルの定着

本授業スタイルを継続的に行うと, 生徒は課題を解決する手順や方法を理解し, 技能として使えるようになった。この手順や方法を身に付けた生徒は, 授業のみならず, 日常生活における課題解決の場面でもその力を発揮できるようになった。

### ② 課題

今後は学習班の形態やめあての工夫を図る必要がある。

## 7 生徒会活動とルーブリックとの関連

ルーブリックは授業以外の場面でも活用されている。日々の学校生活においてもルーブリックを活用している。しかも生徒がルーブリックを作成している。本校では毎月 19 日から 3 日間のうち 1 日を選んで, 保健委員会が決めたテーマにそって, 家族と話をするトークデーを設定している。また, テレビやゲーム, 携帯電話やスマートフォンなどの情報端末に触れる時間を 2 時間以内とするノーメディアデーを併せて設定している。これらのねらいは, 家族と過ごすことで健康的な生活習慣を身に付けることとし, 家庭に協力を得ながら, 保健委員会を中心に実施している。保健委員会では, 主にはトークデーとノーメディアデーの呼びかけや実施状況の集計をしている。しかし, ここ最近では, トークデーやノーメディアの目標設定があいまいになり, 集計も実施したかどうかだけで終わっていた。そこで, 保健委員長から「日々の授業でしているルーブリックを, トークデーとノーメディアデーにも活かして, 新しくルーブリックを作りたい」という提案により, 保健委員会でルーブリックを検討, 作成した。その検討の際, まずは個人で考えをまとめ, その後グループで交流, そして全体で検討するという日々の授業スタイルが, 委員会でも自然に行われていた。たくさん意見が出る中で, あっという間に, ルーブリックはできあがり, ルーブリック作りは, 生徒たちの中に定着できているように感じた。

表 4 保健委員会で作成したルーブリック

トークデー			
S	A	B	C
B-Aのことがせよ。10分以内 の話し。家族の仲の話し。	ゲームの話し 家族の話しと話しせよ。	いじりや争いの 話しはあきらめよ。	話し相手。
ノーメディアデー			
S	A	B	
1時間未満	1時間以上2時間未満	2時間以上	

## VI 成果と課題

### 1 成果

図8と図9は論理的思考に関する5月, 7月,

10月の生徒の意識調査の結果である。どちらともある程度の高まりが見られる。この要因は、鷹取中学校授業スタイル及びルーブリックを生徒と共有したことや、筋道立てて説明できたかどうかを相互評価したためと考えられる。また、図10よりほとんどの生徒が自分で課題を設定することができていると自覚している。問い続ける学習者の育成のための第1歩である課題設定が確立していることで鷹取中学校授業スタイルを生徒自身が動かすことにつながると考える。図11、図12より論理的思考の「鍵」となる思考ツール・思考スキルの活用が生徒にとって有用であることがわかる。

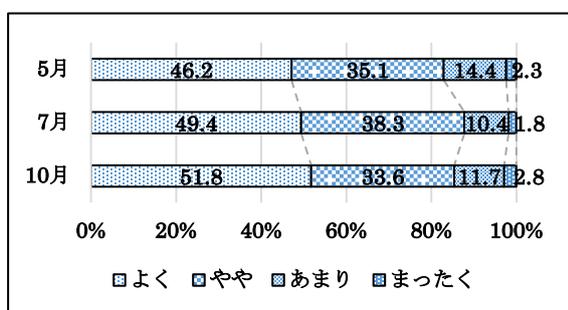


図8 他人の考えを根拠に注意して聞くことができる (%)

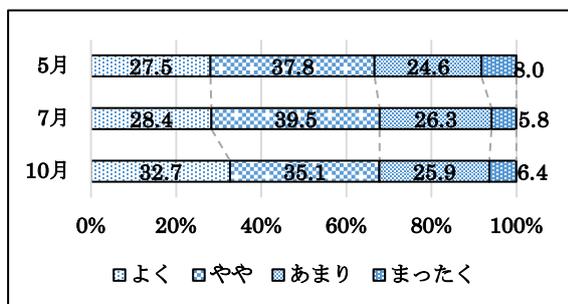


図9 自分の考えを筋道立てて説明できる (肯定的評価) (%)

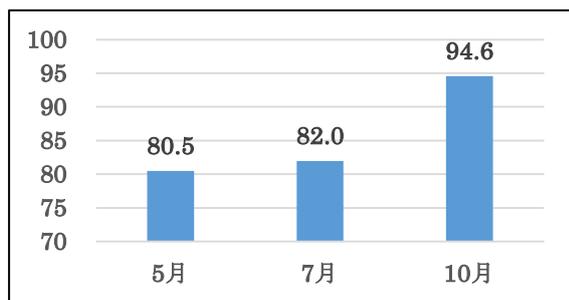


図10 授業では、自分で課題を設定しています (肯定的評価) (%)

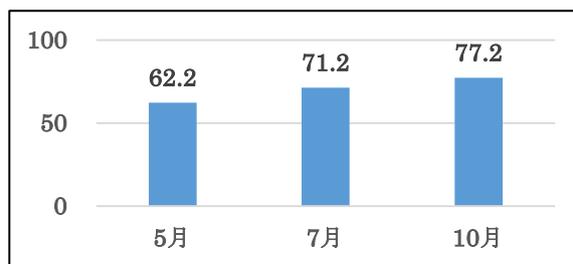


図11 授業では、情報を、思考ツールを使って、比べたり (比較)、仲間分けしたり (分類)、関係を見付けたり (関係付け) して、何がわかるのかを考えています (肯定的評価) (%)

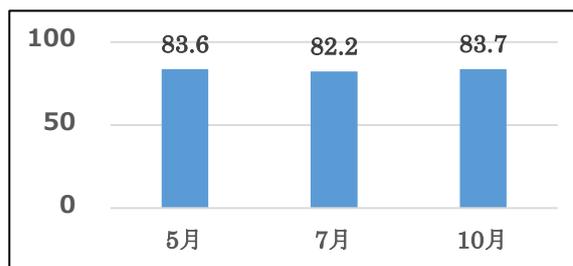


図12 授業で思考するとき、思考ツールがあると考えやすい (肯定的評価) (%)

## 2 課題

夏季研修において学びの足跡の生徒記述例を作成し、学びの足跡の具体的なイメージを生徒と共有した。各教科でかなりの量を書くので、生徒の書く力も高まっている。しかし、図13より生徒アンケートの5月7月と比べて10月の数値が下がった。このことは、学びの足跡のルーブリックを設定したことで、生徒が今までより真剣に授業の振り返りと向き合わなければならないためと考えられる。しかし5月、7月と比べて記述内容が充実していることは後述の「各教科の取組」からもわかるようになりかなりの高まりを示している。学びに向かう力の育成につながっていると確信している。

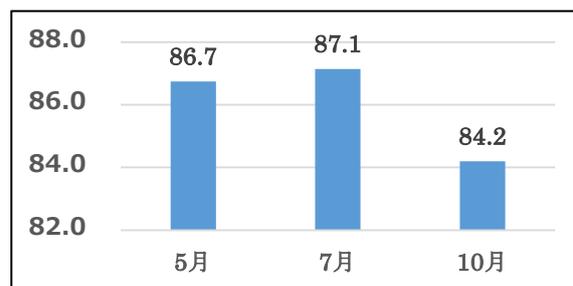


図13 「学びの足跡」は自分の授業を振り返るのに役に立つ (肯定的評価) (%)

### 3 今後に向けて

今後は教科だけではなく、日常生活においても、課題を見出し、課題解決のために仲間と協力して解決に向かおうとする態度を育成するためにもこのスタイルを生徒と改善していく必要がある。

グローバル化が進む中で、グローバル人材育成のためにも相手が何を言いたのか理解し、自分の考えを他者に分かりやすく伝えることは重要である。中学校の段階において論理的に「考える力」を身に付けることは資質・能力の育成に大いに役立つと考える。

## Ⅶ 終わりに

本校の研究は、主体的、対話的で深い学び、いわゆるアクティブラーニングを踏まえて行っている。それは授業規律もなく目的を持たずただ活動しているという行動面だけが見られる授業ではなく、生徒の頭の中がアクティブに活動している、頭の中が主体的ということである。それには「思考」という必要不可欠な活動があり、生徒は常に「思考」を繰り返しながら、50分間の授業を精一杯作り上げている。生徒だけではない。私たち教師自身も失敗をもとに、課題を設定し、教師同士相談しながら日々試行錯誤を繰り返し、研究を推進している。その意味でも「課題発見・解決学習」が一番必要なのは教師自身ではないだろうか。

### 【引用文献】

黒上晴夫(2017)：『総合的な学習の時間』東洋館

文部科学省（平成28年）：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」中央教育審議会

文部科学省（平成29年）：「中学校学習指導要領解説 総則編」

### 【参考文献】

関西大学初等部(2018)：『関大初等部式思考力育成法研究』さくら社

山鳥重(2002)：『「わかる」とはどういうことか—認識の脳科学』筑摩書房